

経済・金融 フラッシュ

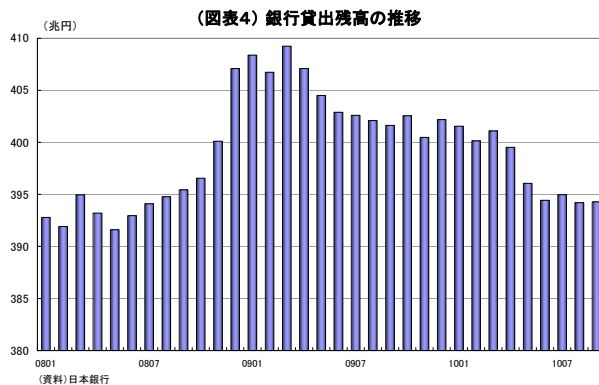
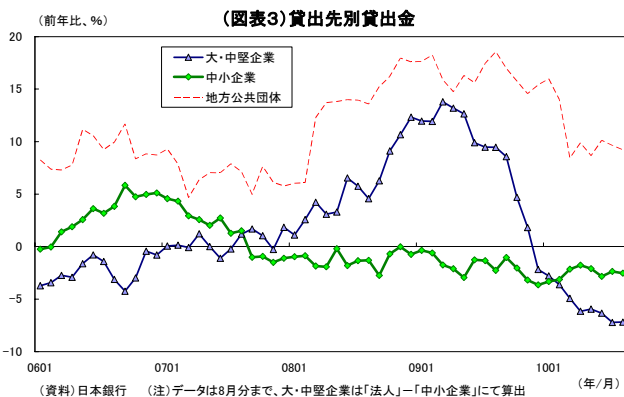
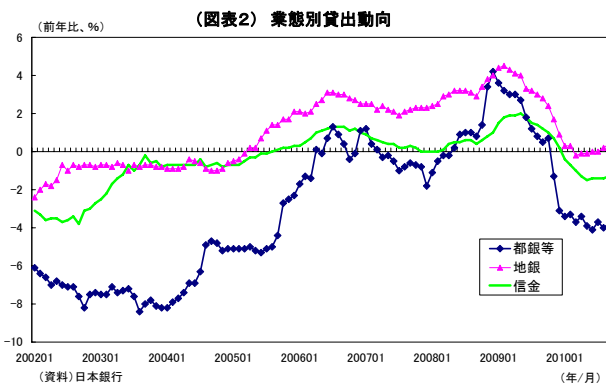
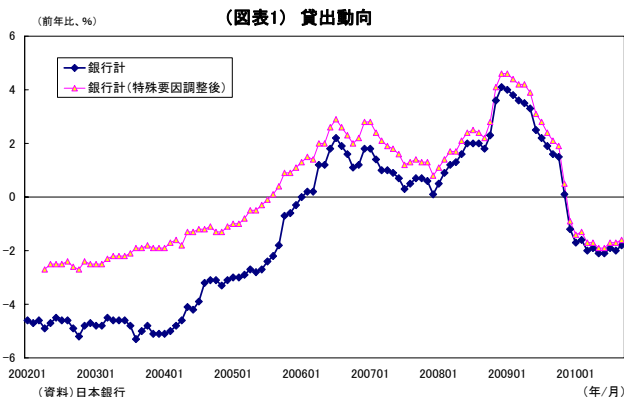
9月マネー統計： 投資信託がついに前年比減少へ

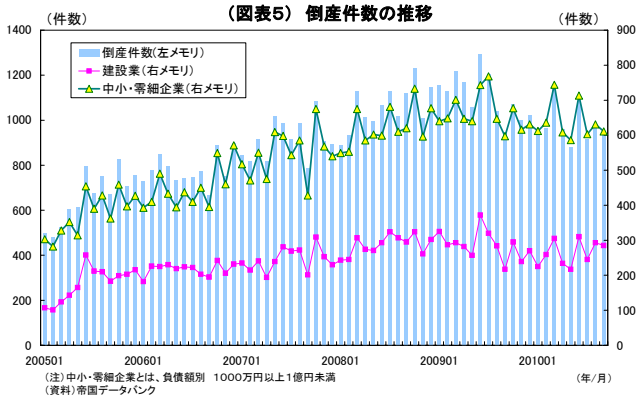
経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

1. 貸出動向： 政策の下支えがあっても減少が続く

日銀が発表した貸出・資金吸収動向等によると、9月の銀行総貸出（平残）の前年比伸び率は▲1.8%と、10ヶ月連続の前年割れとなった。前月の同▲2.0%からはやや改善したが、ここ数ヶ月は▲2%前後での推移が続いている。地銀（第2地銀含む）は引き続き若干増加（前年比0.4%増）したが、都銀等（同▲3.9%）では大幅なマイナスが継続している。

政府・日銀はこれまで、資金繰り支援や資金需要創出のため、各種の政策を導入してきた。具体的には、「中小企業金融円滑化法」（6月末時点累計利用額約14兆円）、「景気対応緊急保証制度」（10月14日時点累計保証額約23兆円）、「成長基盤強化を支援するための資金供給」（第一回供給額4625億円）などだ。すなわち、現在の貸出残高はこれら政策で下支えされている面があり、これらを除いたベースではさらに深刻な状況となる（図表1～5）。

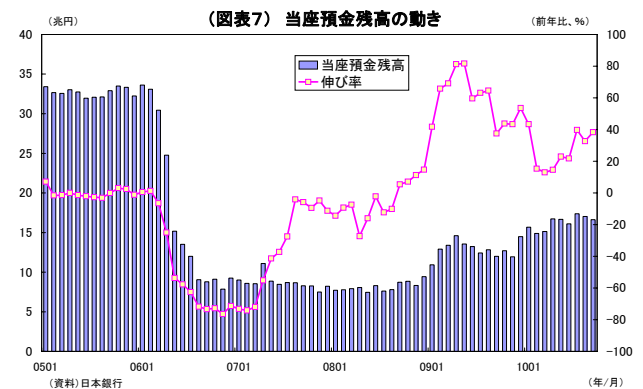
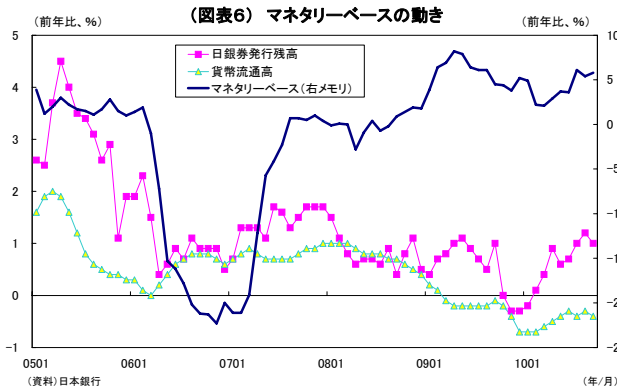




2. マネタリーベース：日銀は介入資金を放置

日銀による資金供給量を示す9月のマネタリーベースは前年同月比 5.8%増と、7月の 6.1%増以来の高い水準となった。前年比プラスは 25 ヶ月連続。日銀が緩和姿勢を示す目的で為替介入に伴う資金供給を放置したこともあり、日銀当座預金残高が同 38.4%増(前月は 32.7%増)と高い伸びを示した。

日銀は 10 月5日の臨時決定会合で実質ゼロ金利の導入と資産の買い入れを含む追加緩和を決定した。10 月以降はこの緩和効果が現れてくることもあり、マネタリーベース残高は引き続き高い水準で推移していくと見られる(図表 6,7)。

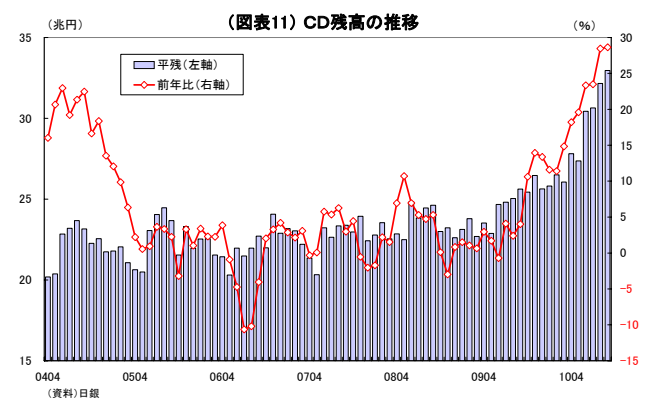
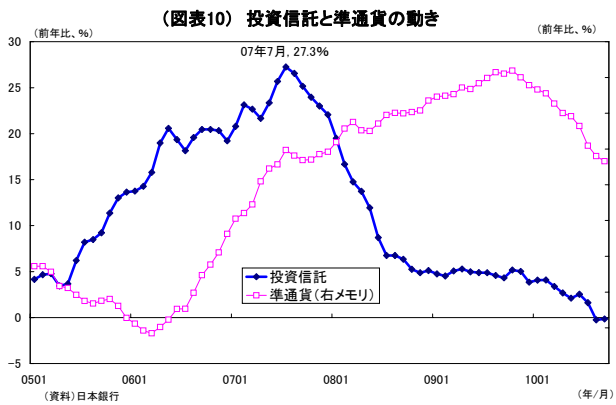
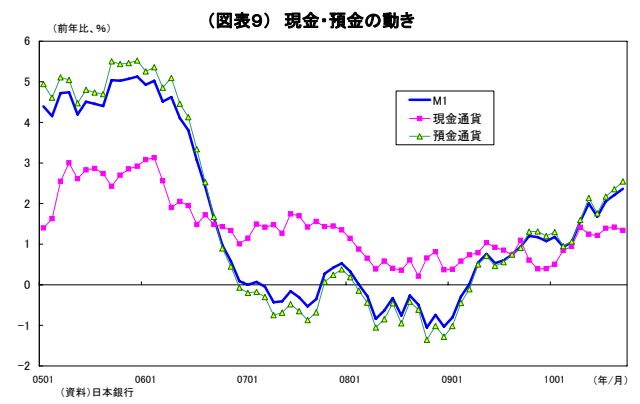
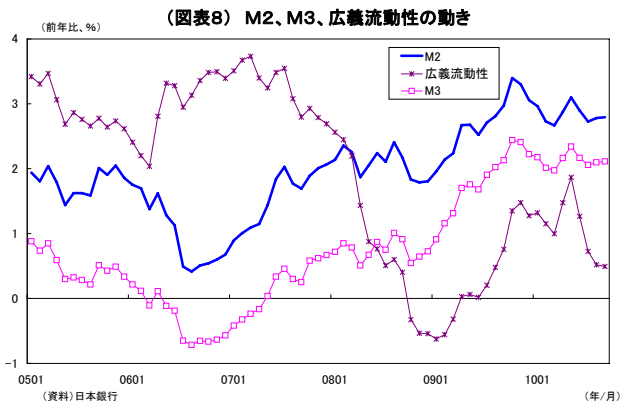


3. マネーストック：投資信託がついに前年比減少へ

通貨供給量の代表的指標である9月の M2 (現金、国内銀行などの預金) 平均残高は前年同月比 2.8%増(前月も同じ)、M3 (M2 にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む) は同 2.1%増(前月も同じ)とそれぞれ増加した。引き続き定期預金など準通貨の伸び率が低下する一方、預金通貨(普通預金など)や CD(譲渡性預金)といった流動性の高い資産の伸び率が高まっている。

一方、M3 に投信や外債などを含めた広義流動性の伸びは 0.5% (前月改定値も同じ) と引き続き弱い。内訳では、国債(対前年▲20.2%、銀行保有分等を除く)、金融債(同▲12.2%)などで大きなマイナスとなっているが、特に注目されるのが投資信託の動きだ。投資信託は対前年▲0.1% (前月改定値は同▲0.2%、改定前は同 0.1%) と同じ統計ベースで遡れる 2004 年 4 月以降初のマイナ

スとなった。米国経済の減速など世界経済の不透明感の高まりから、安全資産、しかもキャッシュ化の容易な資産への選好が高まっているようだ（図表8～11）。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。